Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-29

書評　菅原稔著『戦後作文・綴り方教育の史的研究』

宇賀神, 一

(Citation)
研究論叢,23:53-55

(Issue Date)
2017-06-30

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/E0041184

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0041184

菅原　稔　著

『戦後作文・綴り方教育の史的研究』

宇賀神　一（神戸大学大学院博士後期課程）

本書の著者、菅原稔氏は2003（平成15）年３月に論文「戦後作文･綴り方教育の研究」によって広島大学から博士（教育学）学位を授与されおり、学位論文は2004（平成16）年に溪水社から公刊されている。その内容に多少触れておくと、「戦後兵庫県下において展開された作文・綴り方教育を、可能な限りの第一次資料に基づいて詳細に分析し考察し、戦後作文・綴り方教育の地方的展開の姿を明らかにすることを目指した」著書だという（『戦後作文・綴り方教育の研究』、５頁）。

今回書評した『戦後作文・綴り方教育の史的研究』はこれに続く菅原氏の単著であり、「戦後の20年間（昭和20年代･昭和30年代）に見出される作文・綴り方教育の歩み」についての「歴史的な展開のありようを明らかに」する試みであるという（まえがき、ⅱ頁）。本書は先の著書とは異なり、地域を限定せずに、昭和20～30年代の作文・綴り方教育関連の著書や雑誌、運動・論争などを広範に対象にして、それらの整理と意味づけをおこなっている。まずは本書の構成を確認してみよう。

第１章　戦後作文・綴り方教育の胎動
　第１節　「国語創造」誌の創刊
　第２節　作文・綴り方教育誌の地方的展開
　第３節　昭和22年度・昭和26年度「学習指導要領」と戦後作文・綴り方教育の再出発
　第４節　同人誌「つづりかた通信」と戦後生活綴り方教育復興の一側面
第２章　新教育運動の中の作文・綴り方教育
　第１節　コア・カリキュラム運動と作文・綴り方
　第２節　単元学習の草創と作文・綴り方教育
　第３節　作文・綴り方復興の契機としての『新しい綴方教室』
　第４節　「書くこと（作文）」と「つづり方（つづること）」の位置と意義－「生活文」指導をめぐる作文・綴り方論争－
第３章　作文・綴り方教育の展開と拡大・発展
　第１節　学校文集『山びこ学校』の刊行とその評価・反響
　第２節　「第１回　作文教育全国協議会（中津川大会）」に見る戦後作文・綴り方復興の到達点
　第３節　生活綴り方批判の「受容」と「反批判」
第４章　戦後作文・綴り方教育の到達点と課題
　第１節　野名・田宮論争とその背景としての「1962年度活動方針」（日本作文の会）
　第２節　倉澤栄吉の「書くこと（作文＝綴り方）教育論
　第３節　児童文の特性に着目した「文章表現形体」論の誕生

第１章では、①1946（昭和21）年から1949（昭和24）年まで刊行された国語教育総合雑誌『国語創造』、②1947（昭和22）年北海道で刊行された著書『綴方実践への道』、③昭和22・26年度の学習指導要領、④1950年（昭和25）年６月から10月まで刊行された同人誌『つづりかた通信』の分析がおこなわれている。

本章の対象はおおよそ1947（昭和22）年から1950（昭和25）年で、菅原氏はこの時期を戦後の作文･綴り方教育における「胎動」期として位置づけている。この「胎動」期は、本文の内容に即していえば、作文・綴り方に

教育学的効用が認められながらも、体系的な理論が提唱されて実践に結びつくまでにはいたらなかった時期、と小括できると思われる。

この時期の作文・綴り方教育をめぐる様態を本文の内容に照らしながらみてみると、たとえば、作文・綴り方教育を「狭い意味での国語科の表現技能」や「言語能力の範囲だけにとどめず、その根底にある思想・認識」の教育を包括した生活指導の文脈で捉えるという観点(25頁)、あるいは作文・綴り方(教育)を、目的とする立場と手段とする立場の「二元論的なとらえ方」が台頭し(65頁)、国語教育雑誌などを通して広く世間に問われたという。

第2章では、新教育運動との関連を問いながら、作文・綴り方教育の動向が辿られている。具体的には、コア・カリキュラムおよび単元学習における作文・綴り方教育の位置、国分一太郎の『新しい綴方教室』、そして後述する1950年代初頭の作文・綴り方教育をめぐる理念的対立が扱われている。本章では、作文・綴り方教育について、戦前との連続・非連続という視点が意識されはじめた様子や、新教育の潮流に乗ってあたらしい社会状況に適応する方向が模索されはじめた様子などが描かれている。

本章第4節において、菅原氏は1950年代初頭の新聞誌上における作文・綴り方教育への批判と、それに対する国語教育者・国語教育学者の反響を紹介している。本節の内容を略言すれば、『やまびこ学校』刊行を契機として、綴り方か作文かという二元論的な議論が活発化し、それに対して国語教育者らは、綴り方か作文かという対立図式的な理解ではなく、両者を止揚することを目指していった(あるいはその方針を示した)という。

筆者は、本書の力点の一つを本節に認めるものである。菅原氏は本書に先立ち、「作文教育と綴り方教育を区別せず、両者を可能な限り統一し止揚する立場に立」つと述べている(『戦後作文・綴り方教育の研究』、5-6頁)。本節は、そうした菅原氏の思想、すなわち作文(教育)と綴り方(教育)を二元論的に捉えることへの批判と、両側面は止揚しうるとする立場を、作文・綴り方教育を巡る歴史を援用しながら示しているように思われる。

つづく第3章では戦後の作文・綴り方教育の拡大・発展の様子が、第4章では到達点と課題が検討されている。詳しくは本書に譲るとして、その内容をおおまかに確認してみたい。

菅原氏によれば、「戦後の生活綴り方(教育・運動)は、戦後、様々な形で復活・興隆し、1950年代の初めに一つの頂点を迎えた」という(174頁)。本書ではその「復興・興隆」の例として、無着成恭編『山びこ学校』(青銅社、1951年)や「第1回 作文教育全国協議会(中津川大会)」(1952年)などが挙げられている。あるいは、「わが国の戦後の作文・綴り方の復興・興隆を語る上で欠かすことのできないもの」と紹介されている倉澤栄吉の作文・綴り方教育理論(235頁)も、その一つだとみてよい。菅原氏は、これらの事例を取り上げて、戦後作文・綴り方教育の展開過程と到達点を描出しようとする。

こうした作文・綴り方教育が「大きく方向転換」したのが1962(昭和37)年だという(174頁)。菅原氏はそのメルクマールを、この時期に民間教育団体から生起された生活綴り方批判と、それに対する国語教育界の受容と反批判の過程と、日本作文の会の活動方針案「意義ある伝統のもとに確信をもって前進しよう」に認めている。そして、これらを境に転換した「戦後の生活綴り方(教育・運動)の特質でもあり成果」の一つが、「文章表現形体」という観点から児童・生徒の文章表現能力の実態を捉えることであったという(184頁)。

「文章表現形体」論については、本書の最終節（第４章第３節）で言及されている。菅原氏によれば「系統的・化学的な指導過程や指導方法・指導内容の『定式化』を行」う可能性を示したという意味でこの「文章表現形体」論の登場は、「戦後の生活綴り方（書く事・作文）教育の歴史の中に、今もなお、大きな意味を持つもの」だという（260頁）。

以上のように、本書は特定の対象を通史的に分析した著書ではなく、広範な史資料を用いて、昭和20～30年代における作文・綴り方教育の様態を点描した著書である。こうした構成により、本書は情報量の多い充実した内容になっている。作文・綴り方教育についての知識が乏しい筆者にとっては、各節で述べられる一つひとつの歴史的事実が新鮮で、学ぶところが多いものであった。

さて、以上のように意義深い本書に対して、作文・綴り方教育は門外漢である筆者の立場から二つ述べてみたい。

一つ目は、菅原氏（あるいは専門の研究者）にとって自明のことであっても、もう一歩踏み込んで記述してほしい箇所がいくつかあった、ということである。たとえば、第３章第３節は、「わが国における戦後の生活綴り方（教育・運動）は、戦後、様々な形で復活・興隆し、1950年代の初めに一つの頂点を迎えた」という一文からはじまり、「頂点」を迎えた戦後の作文・綴り方教育が「大きく方向転換」したという筋で話が進んでいく（174頁）。

では、ここで述べられている「一つの頂点」とは、具体的にはなにを指すのだろうか。それまでの節で述べられてきた事実のすべてを指すのだろうか。あるいは、そこから読者なりに「頂点」を導き出したうえで読み進めていくものなのだろうか。いずれにせよ、「頂点」の意味するところについて理解が不十分な筆者には、「転換」の意味もまた十分につかみきれなかった。

二つ目は、菅原氏が本書の全体を通していかなる課題に挑み、最終的にどこに至ったのかという疑問である。本書は序論と結論がなく、各章ごとの小括もおこなわれていない。そのため、節（章）で明らかになった事実と、別の節（章）で明らかになった事実について、それらを線でつないで大きな絵を描く作業は読者の側に委ねられている。

この作業は、不勉強な筆者の手にはあまるもので、そのためタイトルにある「戦後作文・綴り方教育の史的」な全体像を明確に捉えることができなかった。とはいえ、作文・綴り方教育をめぐる戦後初期の状況や関係者たち思想を辿りながら、それらを自らの手で紡いでいく経験が、筆者にとって極めて刺激的でもあったことを付言しておく。

（溪水社刊 2016年６月発行 本体価格3,500円）